

JICA 中国事務所ニュース

(2007年4月号)

1. 最近のトピック

(1)平成18年度JOCV3次隊が任地に出発しました！

今年3月29日から北京で語学訓練を行っていた青年海外協力隊の平成18年度第3次隊の9名が、4月20日(金)にそれぞれの任地に出発して行きました。

各隊員は、北は遼寧省から西は新疆、南は広西と、ほぼ全国に散らばる形になりましたが、距離は遠くてもこれまで培ってきた同期の絆はきっといろんな場面で心強い支えになることでしょう。

なお、出発前の19日(木)に開催された世青中学の先生方ご出席による終了時評価会の席では、これまでの語学訓練の成果を活かして、全員が中国語での挨拶を行い、挨拶終了後、語学訓練修了証書が各隊員に授与されました。



中日青年交流中心の房先生から修了証書を受け取る隊員

先生方は、それぞれの隊員が一生懸命発表する姿をとんでもうれしそうにご覧になっており、北京に来た時点での中国語力と比べて、彼らの語学力が一段と伸びていたことに、とても満足されていたようでした。

各隊員はそれぞれの活動場所でこれから本格的な活動に入っていきますが、きっと北京で学んだ訓練の思い出はこれからの活動においても非常に励みになることと思います。

(2)初代所長による植林ツアーの実施！

ようやく本格的な春が訪れた北京市郊外の十三陵近くにある莽山(マンシャン)国家森林公园において、当事務所の初代所長である八島継男氏が理事を勤める国際善隣協会の主催により、日中友好のための植林ツアーが4月7日(土)に開催されました。

当日は北京には珍しく青く晴れ渡った空の下、中国側は北京環境保護基金会や北京緑化基金会などのボランティア約150名、日本側は、日本から北京の大学に留学している留学生や日中林業生態研修センタープロジェクトの各専門家やJBIC北京事務所、JICA北京事務所関係者など約70名が参加しました。



植林ツアーの様子

今回は、故小渕首相による小渕基金の経費により、今後5年間をかけて約1,500本の植林を行っていく事業の始動式として、120本ほどの梅や松の苗を植えました。中国側が予め植林用に穴を掘ってくださっていて、参加者はその穴に苗を置いてスコップで土をかけて埋める、という初心者にとっては簡単な作業でしたが、初めて植林を体験した人も多く、スコップの扱いに苦心している様子もありました。

今はまだ小さい苗ですが、何年か後に大きな木に育っていくことを期待してやみません。

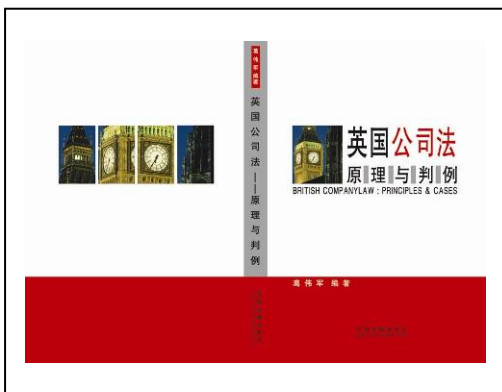
(3)帰国研修員の著作物

「イギリス会社法:原理とケース」が出版！

葛偉軍氏は、2002年～2005年の間、JICA長期研修員として九州大学の博士課程(国際経済・ビジネス法)を習得し、博士号を取得しました。帰国後は、弁護士の仕事を辞め、中国経済分野の名門大学である上海財経大学法学院の講師として、JICA長期研修で得た知識や経験を活かし、人材育成に力を注いでいます。

葛偉軍氏がJICA長期研修員として取りまとめた研究成果と英国ケンブリッジ大学で得た知識を有効に活用し、「イギリス会社法」という書物にまとめたものが、この度、中国法制出版社から出版されました。出版にあたっては、JICAは帰国研修員フォローアップ制

度を活用して一部支援を行っています。イギリスの会社法は世界に先駆けて約300年前に初めて作られたことから、近代会社法のバイブル的な存在となっており、多くの国ではイギリス会社法を参考として、自国の会社法を編纂しています。中国においては、会社法ができて以降、まだわずか10数年しかたっていないため、イギリス会社法から学ぶべき点が多々あるとして、葛氏はイギリスで蓄積した会社法の知識を踏まえ、九大でさらに多くの関連資料を収集して本書を取りまとめました。



なお、本書では、各種の企業裁判における判決書から要点を引用し分析する手法を通じて、読者にイギリス会社法の原則に対する理解を深めてもらうことを主眼としています。

開発途上国である中国の実情に適応する会社法のモデル及び欧米学者による研究事例が少ない中、本書の刊行によって、中国と諸外国との会社法比較研究を促進され、中国会社法の整備と発展の一助となることが期待されます。本書は、来年4月から上海財經大学法学院の教材として導入される予定となっています。

*** 葛偉軍帰国研修員の現在:** 葛偉軍氏は、帰国後まもなく上海財經大学法学院の講師となり、大学生向けのビジネス法、比較会社法の講座を英語で実施しようと努めましたが、当初、学生たちは授業を全く聞いてくれなかったそうです。そのとき、葛氏は生徒達に「みなさん、私のことを先生だと思わないでください。ぼくのことを蠟燭だと思ってください。」と言い、その後、自分の北京大学での勉強、ケンブリッジ大学、九州大学での留学経験及び弁護士としての社会経験を必死で生徒達に伝えたそうです。さらに、葛氏は「大卒後10年間必死に頑張っ、また弁護士のような高い収入の職を辞めたのは、今日この場で皆さんのような不真面目な態度の学生の姿を見るためではなく、優秀な法律人材を育てるためだ。」と生徒達に訴えたそうです。

それを聞いた生徒達はおしゃべりを辞め、以後は真面目に勉強するようになったとのこと。葛氏が教えている学生は70名ぐらいいるそうですが、当初卒業論文の指導教官として数人の生徒から指名されていただけだったのが、半年後の現在、30数名の生徒が葛氏を指導教官として指名しているとのことであり、その人気の高さがうかがえます。

2. 主な調査団(派遣中・派遣予定)(4月)

日中林業生態研修センター計画中間評価調査団

渡辺団長 (4.12-4.21)

中国知的財産保護プロジェクト運営指導調査団

(4.24-4.27)

草の根モニタリング調査団 (4.22-4.28)

3. 4月の主要行事

4/10-11 雁門関地区生態環境回復及び貧困緩和プロジェクト合同委員会(山西省)

4/12-20 日中林業生態研修計画プロジェクト中間評価

4/19 JOCV18年度3次隊任地配属

4. 専門家・ボランティアコーナー

今月は、青海省で活動している瀬川真由美隊員(日本語教師)からの投稿と昨年沖縄センターで実施した集団研修に参加した帰国研修員/陳薇さんからの投稿をご紹介します。

(1)青海省西寧市の様子

私の任地は「青海省西寧市」。チベット族や、土族、回族などの少数民族が多く住む町です。ここには少数民族の人々が住む町ならではの面白さがあります。



東関清真大寺



タール寺

例えば、町の中に回族のお寺「東関清真大寺」があり、マイ絨毯を敷きお祈りをする人々がいるかと思えば、町

の中心からバスで 30 分ほど行ったところには、チベット仏教のお寺「タール寺」があり、チベット族の人たちがお参りをしています。

町から少し行けば土族の住む町があるし、もっと身近なところであれば、毎週週末になると(冬はない)、学校の広場でみんなが輪になって、チベット音楽に合わせてチベットダンスを踊っています(これは、民族学院ならでは?)。



チベットダンスの様子

こんな風の一つの町の中で複数の少数民族の文化に触れることができる町「西寧市」。いろんな文化の入り混じった町「西寧市」。のんびりした中におもしろさがある。そんな町です。是非一度いらしてみてください。(17-2 日本語教師 瀬川万有美)

(2)日本の沖縄美ら海水族館でのボランティア活動

日本の沖縄国際センター(OIC)での研修の日々は、専門的な知識を学ぶだけではなく、ある種の国際交流活動に参加したり、当地の文化や風俗を実感できる素晴らしい機会であったし、沖縄の友人もでき、私にとって非常に有益な機会でした。

2006年7月2日、OICの関係者は、浦添市が主催するボランティア活動「子供の海亀を海に返す」に参加しました。場所は、沖縄県の「美ら海(ちゅらうみ:美しい海という意味の沖縄の方言)水族館」です。私の指導教官である知念さんは私に、中国語で「海亀」はなんと言うか、と尋ねてこられたので、私は漢字を書いて説明しました。知念さんは、今回のボランティア活動において、私を中国側の代表にしたいと言って下さり、私はとても光栄に思い快諾させていただきました。

美ら海水族館は、2002年に建設され、すでに4年が経過していますが、この水族館の設計概念は海の世界を陸上で体験できるというものであり、海洋動物に対しても全く新しい棲み家を提供しているものです。この水族館は魚類を保護するために、サンゴの温度や水のpH値を非常に厳しく管理しており、特に、サンゴ礁と魚の生存を確保するために、水温があまり高くないよう

に厳しく調節されています。また、水槽の中の水の4分の3はろ過循環水ですが、残り4分の1は新鮮な海水です。さらに、全水槽の水量の合計は7500トンですが、黒潮の海流が近くにあることもあり、この水族館の海洋生物たちにとっては、水に関する問題は全くないとのことです。日本の設計者は世界最大の水族館の鑑賞用ガラスを最新の研究を基に作り上げ、その中では、大小の海洋生物たちが一つの新しい大きな家族となって、仲良く楽しそうに生活している様子が楽しめます。

しかし、いかにたくさんの人たちが彼らを見に来ていても、彼らは全く意に介さず、思う存分自由に泳ぎまわっていました。この水族館が沖縄の人にとって最も好かれている場所だということもよく理解できました。



各研修員が各国語で海亀という言葉を紹介した

ボランティア活動の当日は気温が非常に高かったのですが、各参加者の活動にかける熱意も非常に熱いものでした。異なる国家をそれぞれ代表する形でOICから参加した私たちは、演台の上に座り、各国の言葉で「海亀」という言葉を2度紹介しました。司会者が私に質問をした際、私は中国人としての日本に対する関心や友好の思いを皆さんに伝えるために、非常に大きな声で、中国語で「海亀、海亀!」と言いました。この後、私たちはそれぞれの小亀のところに分かれて記念撮影をした後に、彼らがすくすくと健康にそだっていくことを願いつつ、非常に惜しみながら彼らを大海の懷に帰しました。



小亀を抱く陳薇・元研修員

私は、自分の小亀のNo.である992という番号を永遠に忘れないと思います。私たちは小亀と同じように非常に身近に大海の熱い思いと包容力を感じました。なお、水族館の付近の花壇には、日本の皇太子殿下の結婚記念樹

が建っていました。記念樹は全く豪華な雰囲気ではなく、質素で清潔な感じで設計されており、とても自然に美ら海水族館の一部として溶け込んでいました。

今回のボランティア活動は私にとっても初めての経験でしたが、非常に有意義なものでした。このような素晴らしい機会を与えていただき、JICAとOICに大変感謝しています。私たちはいろいろな国から参加しましたが、人と動物がお互いに仲良く暮らしていくということはこんなにも重要であるということを確認し、深く感動しました。海洋動物や自然を保護するということは私たち人類自身を保護するということでもあります。美ら海水族館は人が作り上げた一種の奇跡であり、私たち人間にとって比べるものもない財産と豊かで鮮やかな視覚的世界を与えてくれると同時に、海洋動物達にとって安全かつ美しい家を与えているといえます。美ら海水族館はその美しい響きにふさわしく、真に美しい水族館であると思います。(2006 年度集団研修参加研修員:陳薇、「電子政府推進のための Web アプリケーションスペシャリスト(オープンソース系)(A)」に参加)

*。専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所 周南 (zhounan.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。